

小倉孝誠

(慶応義塾大学教授)



『パリの秘密』の社会史 ——ウージェーヌ・シユールと新聞小説の時代

ウージェーヌ・シユール(1804~57)は19世紀フランスの作家。

『パリの秘密』は彼の代表作で、文学史の本には必ず出てくる小説ということですが、今は本国でもほとんど読まれていないそうですね。

■ええ。シユールは社会派大衆小説の先駆者と思われ、パリの下層社会を描いた『パリの秘密』は当時の大ベストセラーでした。同時代のデュマ、バルザックといった大作家も嫉妬したほどの人気で、連載中からシユールには多くのファンレターが届いたといえます。ところがその作品が読まれなくなった。なぜか、というのが出発点でした。

——邦訳も明治期から何度か出たのに、今では読んだ人はほとんどいない。この本では1章を割いてストーリーを詳しく紹介しています。

■第10部まで1年4カ月にわたって連載された大長編ですから、まずは内容を知ってもらおうと。1880

年代に出版された「挿絵入り版」の図版も入れ、19世紀大衆小説のイメージを喚起するのに努めました。

——当時のフランスにも、大衆文学と純文学の区別はあったのですか。

■歴然とした違いがありました。ただし、バルザックやゾラといった作家たちも生活のために大衆的な新聞小説を書いています。問題は、『パリの秘密』に「大衆的な新聞小説」というレッテルが張られてしまった結

デュマ、バルザックも

嫉妬した社会派大衆小説

果、顧みられなくなったことです。フランスでもそうですから、まして純文学志向の強い日本の研究者が目を向けることはありませんでした。

——文学史とは別に、社会思想の分野でも、しばしばシユールの名前が上がるようですね。

■興味を引かれたのは、その点です。『パリの秘密』を書いたころ、シユール

は社会主義に近づき、名医の家系という上流社会の出でありながら、貧しい都市労働者の生活実態を描くことに自らの使命を見いだしました。

フリーエ主義に基づきユートピアを描いた作家としても名前が残っているのはそのためです。逆に、マルクスは『パリの秘密』を引き合いに出して、ユートピア的な空想性を批判しました。その時代の思想を色濃く反映しているために、作品としての評価以前にイデオロギー的なイメージが定着し、時代が変わると古びて見えやすいのも、読まれなくなってしまった理由の一つです。

——今、文学作品として、どう評価しますか。

■冗長な部分は確かにありますが、当時の民衆を鮮やかに描いたのは貴重です。大衆小説らしく登場人物の善悪の色



新曜社
3360円

分けがはっきりしていますし、悲惨な境遇に陥った女性の姿は女性読者の心をとらえました。並外れた能力を持つ正義のヒーローが活躍するのも大衆小説の常道ですが、『パリの秘密』の主人公はその最初です。今年はシユールの生誕200年に当たりますが、再評価を期待しています。

(聞き手 大井浩一・毎日新聞学芸部)